

世界人類共通

「魂」の輝き

大ヒット映画『リメンバーミー』を鑑賞しました。日本では昨年二月十六日に全国で上映されたディズニーマニメ映画です。第九十回アカデミー賞では、「長編アニメ映画賞」と、「主題歌賞」の二部門の受賞を果たした名作です。映画終盤のクライマックスでは、命の尊さと、家族の愛の深さに号泣してしまいました。映画のタイトルとなった「リメンバーミー (Remember me)」というのは英語ですが、これを日本語に訳すと「私を覚えていてください」という意味になります。この映画が教えてくれるのは、「先祖様あつての自分の命」ということ。そして、「いつまでも御先祖様に感謝の念を捧げ、その存在を忘れない事の大切さ」でした。

友人達が集い、故人への思いを馳せて語り合う。市街地はマリーゴールドの香りに包まれ、公園には露店が立ち並ぶ。祝祭は2日間。十一月一日は子供の魂が、二日は大人の魂が戻る日とされています。そんな「死者の日」を描いた、「リメンバーミー (Remember me)」に込められた家族愛の物語と、物語の主軸になっている「2度目の命」という観念について、映画の内容を振り返り、ご紹介させて頂ければ幸いです。

本作では、メキシコの「死者の日」を舞台に、各家庭では御先祖様をお迎えすべく、祭壇に御先祖の遺影を一枚一枚丁寧に飾り、キク科の「マリーゴールド」の花びらを華やかに彩り始めるところから物語が始まります。(※メキシコでは「死者の花」とも呼ばれるマリーゴールド。このマリーゴールドの花言葉は「信頼 生命の輝き 変わらぬ愛」などです。ちなみに、メキシコでは「死者の日」の祝祭を彩る花として、このマリーゴールドを大量に栽培されるようです。)

●「命」という愛の物語

さて、一年に一度だけ、他界した家族と再会できるとされる「死者の日」という祝祭ですが、この感覚は、私達日本人にとっても違和感はありません。むしろ馴染み深い感覚だと思いませんか？

日本では奈良・平安時代から行われている《祖先の霊を迎え、また申うための行事》と言えば、「お盆」や「彼岸」という風習に類似します。

映画『リメンバーミー』のキャッチコピーは、「それは、時を超えて、家族をつなぐ奇跡の歌」です。しなやかに死を見つめ、今ある自分の命を抱きしめる愛の物語。自分の命は、長い長い物語の延長線上にあることに気づき、両親や祖父母、そのまた先祖へのたまらない愛情の念を沸き起こさせてくれます。本作が最終的に帰着していくのは、死そのものではなく、遺された「家族」という名の命のルーツ。生前中に紡がれた決して失われる事のない絆。それはきっと、自らの生を見つめ直す事にもつながるはずで。

私達の「命」に関して言えば、個は個として存在するのではなく、悠久の流れの中に存在しています。自分、他人が今ここに存在する事がいかに奇跡的なことなのかという事実を知るとは、とても大事です。つまり『一人の先祖』がいなかったら、今ここに自分はいないという奇跡のような確率で存在している自分の「命」。それは自分だけの「命」ではないという事です。連続と続く命のバトンを受け継いでいる自分の「命」に気がついたなら、自分の命は勿論、他人の命をも尊重する心を育む必要があると言えるでしょう。

それでは、「命」を尊重するようになるのでしょうか？

●私達は2度生きられる

映画では「2度目の死」という概念が物語の柱になっています。つまり、一人の人間には2度の「死が訪れる」という考え方があります。1度目は「肉体的な死」。2度

目は「人々の記憶の中から消え去り、誰からも思い出されなくなった時」です。生者の世界で誰からも忘れられると、死者の世界からも消滅してしまうという「2度目の死」。

「人は2度死ぬ」という言葉に抵抗を感じる場合は、「人は2度生きられる」という前向きな言い方に変えても良いと思います。

いずれにしても、第2の人生、2度目の命を生きる為には、共に生きてくれる人達の「心」が必要になります。その「心」は、遺される家族や、友人知人が持つています。

人は、1度この世に生を受けたからには、寿命という宿命に則って、必ずその命を返さなければならぬ時が来ます。また、親の最期を見届けるというのは、その子供にとっての「宿命」とも言えます。子供にとって親の死というのは、親がその身をもって教えてくれる、最後にして最大の教えただと思います。だからこそ我々はその思いにしっかりと向かい合い、誇りと覚悟を持って「肉体的死」を受け止めなければなりません。

今を生きている私達が故人の事を思い出すたびに、故人の第2の命は、よりいっそう輝きを増していきます。これをお寺では「法要・供養・回向」と申します。そして我々にとっての「仏さま」とはいつも一番近くでジッと見守って下さる存在と言えます。亡くなった大切な人に再会したければ、いつでも会う事が出来ます。それが2度目の命、「人は2度生き

ることができるといふ素晴らしい魂の
真実なのです。

●死とは、先に逝くだけのこと

故・永六輔（えいろくすけ）さんの歌
『生きていくということ』と題した歌
があります。

生きていくということは、誰かに借りをつくる
こと。生きていくということは、その借りを返
してゆくこと。誰かに借りたら誰かに返そう。
誰かに借りてもらったように、誰かに借り
てあげよう。

生きていくということは、誰かと手を握るこ
と。つないだ手のぬくもりを、忘れないでいるこ
と。巡り逢い、やがて別れの日。その時に悔や
まないように、今日を明日を生きよう。人は
一人では生きてゆけない。誰も一人では歩い
てゆけない。誰も一人では歩いてゆけない。

確かにそうだと思います。例えば、「生
きる」ためには食事を摂らなければ生き
ていけません。食べ物の命を頂いて、自
分の命を生かさせてもらっています。ま
た知らぬ間に、人の思いに支えられて、
つまり借りをつくっていることもある
でしょう。そして「生きていく」という
自立心を抱いたなら、その借りを返して
いく覚悟を持って生きることなのかも
しれません。そうやって、人と人は「絆」
を紡ぎ合ひながら「愛」を育み、生を全
うしていく存在なのかもしれません。

また、「死」という人生の終焉は、特別
な事ではありません。生きとし生けるも
の、みな百歳の確率で「死」を経験する

ことになります。「死」という言葉を忌み嫌
うようであれば、「先に逝く」という出来事
が起きる、という風に思い直しても良いと
思います。生き切った方の姿は、思いのほ
か爽やかな雰囲気を感じさせている事さえあ
ります。

ラテンアメリカでいう「死者の日」は、
日本の「お盆」や「お彼岸」に当たります
が、御先祖様を大事に思う風習は、これか
らも守り伝えていかなければいけないと思
います。大切な誰かを想う気持ち、語り継
ぐ事の大切さを再確認できればと思います。
写真を飾って語り継ぐことで、故人の存在
を忘れない。そしてまた、きつと会えるん
だ、いつかきつと一緒に居られるんだと思
えば、少し心が穏やかになってきます。

今日十五日は、お釈迦様の命日『涅槃会
（ねはんえ）』です。お釈迦様が亡くなった
事を悼み、偲ぶための法要が全国各地の仏
教寺院で行われます。真成寺では、仏舎利
（ぶつしゃり）仏様の遺骨）を模した「涅槃
団子（ねはんだんご）」を撒きます。涅槃
団子を食べると、一年間無病息災で過ごせ
ると言われます。また、お守りとして小さ
な袋に入れて大事に持ち歩く方もおられる
でしょう。そんなお釈迦様ですが、今から
約二千六百年前に生きた人物です。二千六
百年の間ずっと語り継がれる「2度目の命」。
私達も、お釈迦様や先人偉人を見習って、
人のために生きる人生を目指そうではあり
ませんか。

そして、今ある自分の生を感謝と共に、し
っかり全うしてきたいものです。

合掌 副住職 谷川寛敬

予 告

“大笑い”して
心も体も元気に
なしましょう！



真ごころちゃん

日 時：平成31年3月2日（土）
開 演：午後1：30（開場午後1時）
開 場：真成寺本堂
入 場 料：無 料

どなた様も出入り自由！

お待ちしております～す！！

第5回

おてらく

～真成寺お気楽演芸会～

日 時/ 平成31年3月2日(土)
開演 午後1時30分(開場 午後1時)
会 場/ 真成寺 本堂
入 場 料/ 無 料
出 演/ タブラボンゴ魚津
社会人落語家集団「ばらくご」よ
天瀬家小六、川中奈丸

【お問合せ】
玉蓮山 真成寺
〒937-0867 魚津市真成寺町4-6
Tel.(0765)22-2268



駐車場はございますが、限りがございます。
公共交通機関のご利用にご協力ください。

